

読んでみました

傅穎・王小燕主編

『中国人在日本 日本人在中国』

(北京・外文出版社、2012年)

杉本静夫
(協力会員)

一般に私たちが外国の社会を知ろうとするとき、テレビなどで映される社会がその国の現在の姿だという信じてしまう傾向がある。特にここ数年、日中両国のマスメディアの報道の在り方には、私自身多くの疑問を感じている。そして現在、世論調査によると中国に親しみを感じている日本人はわずかに2割程度で、日本に親しみを感じている中国人もかなり減少していると聞く。しかし、相手国を實際

に訪問してみると多くの人は好印象を持ち、親しみを感ずるようになるという。

実はお互いに相手国の真の姿を知らないのである。相手国を正しく理解するためにはその国へ行って生活し、現地の人たちと交流するしかない。しかしそれが出来ないならば実際に相手国で社会の一員として生活している人たちの声に耳を傾けることも相手国の素顔を知る有効な方法ではないだろうか。

この本は日本では北京放送の名前で親しまれている中国国際放送局の局員を中心に日本で生活している中国人、中国で生活している日本人それぞれ20人にインタビューした内容をまとめたものである。日本語訳もあり、日中どちらの言語でも読むこと

が出来る。主たる編集人の傅穎は東京特派員として、王小燕は留学生として日本に長期滞在したことがあり、かつて国際善隣協会でも講演をしたことがある日本語の堪能な女性局員である。

この本に登場する在日中国人はタレント、音楽家、画家、学者、留学生、企業家など多種にわたっている。芸術家は芸術を通して日中の文化交流に力を入れている人が多く、彼らの熱意が伝わってくる。さらに、彼らの中には東日本大震災後、被災地でチャリティーコンサートや募金活動を行っている人もいて、日本に対する彼らの思いには脱帽するばかりである。

在中日本人は環境支援や日本語教師、農業支援など中国に対して支援活動をしている人が多く登場する。彼らの多くはJICAの協力隊員である。しかし、キーキ職人やたこ焼き屋さんも登場していて、大変興味深い。

彼らは反日運動が起きている中でも中国で活動しており、中国に対する熱い思いはまったくぶれることがない。

この本の中の日中40人は相手国の社会の一員となって仕事をし、相手国の真の姿をよく知人たちがいる。この本を読むと相手国の素顔を知り、相手国のイメージが変わるかもしれない。さらに、相手国民の目を通して、知っているようで知らない自国の真の姿も認識することが出来る。そして、普通の人たちによる「草の根の民間交流の積み重ね」がいつの時代でも最も大切なことを再認識させてくれる。

日中交流活動を推進している人には必読の書であり、中国にあまり興味を持っていない人にもぜひ読んでいただきたい一冊である。

ただ、欲を言えば、登場人物の数を減らして、1人1人に対してもう少し深く取り上げたほうが相手国の素顔を語る上で効果的だったと思う。次作に期待したい。

